



1981年にはマニラのスラムにホームステイした

も日本と関係が深い。歴史的に見ても

フィリピンに行ったことがありだろうか。またフィリピンをどんな国と思っておられるだろうか。

再びフィリピンへ

サビエル生誕五百年

巡礼の道

148

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

私の身の周りにもたくさんさんのフィリピン人がいる。日本男性と結婚した人たちが、研修生として日本の企業で働く若者。歴史的に見ても日本と関係が深い。

福岡から首都マニラまでわずか三時間。日本の最南端とフィリピンの最北端は四百八十キロしか離れてない。とは言え、互いに南北に細長い島国。フィリピンは南国、バナナを連想する人も多いと思う。

私がフィリピンを初めて訪れたのは二十八年前の一九八一年。悪名高かったマルコス独裁政権の時である。三年続けて訪れたが、日本のキリスト教人口は国民の二%にも満たない。

当時、日本人シスターがスラムに住み、貧しい人たちを支援しておられた。近くでは山陽小野田

私と同じカトリックが国民の八五%を占めプロテスタントを加えると九三%にも達し、アジア唯一のキリスト教国である。

市の子ビエル高等学校を運営している。ト・イエズス宣教会のシスターもフィリピンにおられた。日本人シスターを介してスラムの

貧しい人たちのために働き、フィリピンのマザー・テレサと慕われたシスター・クリスチン・タンとも交流するようになった。

彼女が作った貧しい人の自立のための共同体が作る石けんや編み物のバザーで売ったりした。しかし、日本人シスターの転勤などで次第に疎遠になった。

わってきた。山岳民族の双子の姉妹の教育援助をし、昨年、二人が大学を卒業した時、卒業式に出席してほしいと言われたが、ちょうど妻が脳梗塞で入院中で実現しなかった。

今年、初めて担当神父からお誘いを受け、三月末に一週間、フィリピンを訪れた。妻が始めた教育支援に私だけが参加しても意味がない。まだ左半身にマヒが残り、かなり不自由な体ではあるが、思い切って連れて

この地こそ太平洋戦争で日本軍が敗走し、八カ月間に二十五万人が死亡。現地の人々にも多大な被害を与えた地である。次回から二十五年ぶりのフィリピン訪問記を書かせていただく。（元山口放送取締役ラジオ局長）

二十五年ぶりの訪問で、今回は支援してきた山岳民族イフガオ族の住むルソン島北部のバギオ、ポントックを訪ねた。

